

障害福祉青年フォーラム in TOKYO 活動報告



フォーラムの概要(金井 聡)

2018年8月26日、東京・池袋で、「障害福祉青年フォーラム in TOKYO」を開催した。当日は、「“共生”って何？」というテーマのもと、朝から夕方にかけて三部構成のプログラムを企画し、西日本や東北地方からの来訪も含め、153名(うちスタッフ30名、登壇者10名)の参加をもって無事に終了した。

この障害福祉青年フォーラムは、2011年度内閣府青年国際交流事業の青年社会活動リーダー育成プログラムで、ニュージーランドに派遣された団員有志によって始まった活動である。派遣団のテーマでもある「障害者権利条約」や「インクルージョン」などを切り口に、これまで各団員の地元(大分、広島、島根)でフォーラムを開催し、今回が5回目であった。

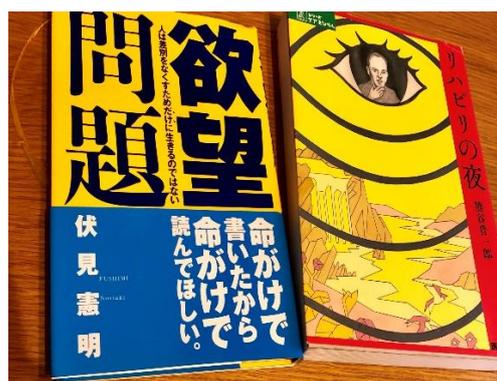
近年、「共生」や「ともに生きる」という言葉が、行政の施策やNPOのミッション、政党のスローガンなどでも、ごく一般的なものとして使われるようになった。2014年に障害者権利条約が批准され、雇用や教育の現場などでも、インクルージョンの考え方に基づく施策が推進され始めている。このこと自体は、評価すべきものとしつつ、それぞれに生活を営む個人にとって、「共生」という言葉は、どのように実感されているのだろうか。言葉自体がもつ優しげで融和的なイメージの一方で、本来、異質な立場にある者が同じ場に居合わせ、活動をともにすることによって、これまで可視化されていなかった対立や衝突が顕在化することも同時に考えられる。障害のある人だけでなく、マイノリティや海外から移動してくれる人々も含めた“共生”のあり方について、本音を交えた議論が十分に蓄積されているとは言えない。

こうした問題関心を踏まえ、本フォーラムでは、“共生”を自明なものとしてではなく、あらためてとらえ返し、何が課題となっているのか、それを解決するヒントはどこにあるのかを考えることを目的に、「“共生”って何？」をメインテーマとした。さらに、抽象的で硬くなりがちなテーマを、柔軟でわかりやすく、一般の人たちにいかに身近なものとして考えてもらえるかを模索し、練馬区内の福祉関係者を中心とするネットワーク「地域をつくる上映会 IN ねりま(ちいねり)」の協力をいただいた。ちいねりは、区内の社会福祉法人やNPO関係者などが集まり、映画の上映会やヒューマンラ

イブラリーなど、地域にねざした活動を2013年から展開している団体である。そこに、日本青年国際交流機構(IYEO)が加わり、三団体による共催で本フォーラムを実施した。

第一部では、「障害×LGBT “共生”って何？」と題して、熊谷晋一郎氏(東京大学先端科学技術研究センター准教授)と伏見憲明氏(作家)による対談を行った。お2人からは、障害とLGBT、それぞれの分野における第一線で、研究や情報発信を積極的に行う立場から、差別や当事者運動をめぐる歴史的変遷やその成果、現代的な課題などについて問題提起をいただいた。第二部では、2つの分科会にわかれ、参加者はどちらかを選択する形式をとった。分科会①のシンポジウム「相模原事件から考える」では、重度障害当事者、家族、介助者に登壇いただき、津久井やまゆり園事件を切り口に、意思疎通や自己決定などをテーマに議論した。これは、犯人が、意思疎通が困難な入所者を選別して「心失者」とし犯行に及んだことを、念頭に置いている。シンポジウムでは、坂川亜由未氏とのコミュニケーションを通じて、重度障害がある人は本当に「意志表示ができない」と言えるのだろうか、障害の有無を問わず人は「自己決定」して生活しているのだろうか、などの問いが提起された。分科会②「ヒューマンライブラリー」は、様々な経験や価値をもつ方々を「生きた本」に見立てて、参加者へ「貸し出す」ことを通じて、対話と交流をはかるイベントである。今回は、障害当事者だけでなく、被差別部落出身者、障害者のきょうだい、児童養護施設出身者の協力をいただき、それぞれの生き様を通じて、多様な立場にある人々の“共生”を考える一つのきっかけになった。第三部のシンポジウムでは、障害福祉青年フォーラムとちいねりの実行委員が登壇し、第一部と二部で提起された内容を振りかえるとともに、“共生”をめぐる一人一人が今後何をできるかを考える場を設けた。それぞれのプログラムの詳細については以下に記す。

第一部 基調講演「障害×LGBT “共生”って何？」報告(金井 聡)



対談の冒頭、熊谷氏の代表作である『リハビリの夜』(医学書院、2009年)について話題にあがった。身体とリハビリ、セクシュアリティなどの関係を、自らの経験を手がかりに論じたこの著書は、90年代前半からゲイ当事者としての発信を続けてきた伏見氏からも影響を受けたものであるという。いわゆる差別的な社会規範の中に、性愛などの欲望が生み出されていくという原点に立ち返り、マイノリティや差別をめぐる問題をどのように考えていくべきか、両者の論考は社会運動のあり方にもインパクトを与えてきた。

熊谷氏は、かつての障害者運動の歴史が、障害者と健常者の“主従関係”をひっくり返さざるを得なかったことを踏まえた上で、障害者が支援者を“手足”として使おうとする議論には疑問を投げかける。そこでの障害者と支援者の関係は、逆の意味で対等なものではなく、支援者の身体の痛みをどう考えるかという問題が新たに浮上する。

伏見氏からは、ゲイやLGBTのコミュニティ内部でもお互いの差異が目立ちやすくなっており、共同性において連帯することが難しくなっているとの指摘があった。多様性や共生が主張される一方で、それらに伴う“コストの高さ”が人を疲弊させている側面があるという。それを受けて、熊谷氏からは、「当事者研究のワークショップでも、“違いさがしゲーム”が始まることもある。そのような場面では、小説を読むときのように、自分とは“異なる”けれど、どの部分に“共感”できるか、という思考回路を、参加者に促すようにしている」という応答があった。TwitterなどSNSを通して、「自分の好みの物語を確認する一方で、それと矛盾するものを排除する力」(伏見氏)が強化されやすくなっている。そうした構造の下では、かつてのいじめとは異なり、「無難な同調圧力」(熊谷氏)が生じやすくなる。「コミュニケーションに難がある」、「他者に配慮ができない」という理由で、“慎慮主義”に基づいた新たな差別が生まれている、と熊谷氏は指摘した。

SNSの広がりに伴い、人々は自分の好む情報を優先にフォローし、一方で立場が異なるものを意図的に避けることができる。そのことは人々を容易に分断するし、同時に、ゆるやかな同調圧力のもと、“空気を読めない”人を排除する方向にも向かう。今、自分のどの“物語”に依拠して世界を解釈しているのかをまず自覚し、それぞれの“物語”の違いを理解した上で対話を試みること。共生の前段階として、そうした作業が日頃からおざなりにされていることを実感させる対談であった。

第二部 分科会①「相模原事件から考える」報告(木村 英幸)



この第二部のフォーラムにおいて私たちは「彼」の主張する「意思疎通のできない障害者は不幸しか生まない」といった考え方に対し、私たちに「応えてみる」ことであった。「重症心身障害」の当事者である坂川亜由未さんはいわゆる、言語ではコミュニケーションがとれないとされている障害者である。

第二部の進行の方法自体が(壇上で亜由未さんの移乗介護を行うこと、会場におやつをくばり食べながら行うこと、等)重症心身障害者がフォーラムに参加する為に、会場を包む空気がやわらかくあるように努めた。

母親は坂川亜由未さんの視線、呼吸音、体温、身体の緊張の入り方等の情報を「亜由未からの返事」として、それに可能な限り応え、声をかけ続けていた。母親より「実は亜由未は相模原事件の話をするとう泣いてしまうのです」という話を受けて、熊谷氏より「相模原事件の話はほとんどしないかもしれません」とのコメントに会場はざわついていた。そこで、熊谷氏より、亜由未さんの「プロセスレコード」をつくる為に協力していただきたいと提案があった。「プロセスレコード」とは、書くことで、その人に注意を向け続けるという体験をするものである。

その内容を最後に全体で共有した。「右手の動きがイエスの反応のように見えた」「視線が右に行くときに拒否しているのかもしれないと感じられた」「登壇者の方々が亜由未さんを受け入れようと暖かい空気があった」など、様々なコメントがあった。注意を向け続ける事で「意思疎通の問題」は「送信と受信の問題」であり、プロセスレコードという手法で「受信の感度」をあげられる可能性に気づきがあった。

会場からのコメントを受け坂川智恵氏より「あゆみの意思が100%理解できているわけではないと思う。でも、わからないからといって何もしないと放って置かれるだけ。待つよりも一歩踏み出すような姿勢の方が必要だと感じている。それで間違っていたら、ごめ～ん。じゃダメなのかなって思う」の言葉にあゆみさんは「首をひねる」「視線を泳がす」「いーよーと声を出す」「右手をくいと上げる」「笑顔を見せる」など「返事」をしていた。「返事」と、受け取れるようになっていた自分の変化にも驚いていた。

第二部 分科会②「ヒューマンライブラリー」報告(菅原英倫)



1 ヒューマンライブラリーとは

様々な価値観、経験を持つ人が「生きている本」になり、その方の人生体験を元に読者の人々と対話をするイベントです。本(語り手)に対し、読者(読み手)は少人数のグループで構成され、より対話の生まれやすい環境を作ります。読者と本が互いの価値観を交らわすことにより、より広い視野の人間観を得ることに繋がり、「偏見の低減」「自己発見の場」「インクルーシブ社会の実現」への効果を期待しています。

2 今回の様子

- ・本(語り手)一冊に対し、45分間の最大で5人までの読者の構成にしました。
- ・読者にも簡単な自己紹介シートを記入してもらい、また対話が始まる前に、「お茶」での乾杯を行うことにより、対話をしやすい雰囲気を作ることを試みました。
- ・それぞれの本の簡単なPR、目次を読者に提示することにより、読者が興味を持ってもらうとともに、選びやすいように試みました。
- ・今回の本の出演者は以下の5冊です。
 - 1 鶴園さん:障がい者プロレス所属、何のために闘うのか
 - 2 内田さん:部落差別、東京大空襲を生き抜いて
 - 3 堀井さん:児童養護施設で育つということ
 - 4 佐藤さん:ホームレス、統合失調症
 - 5 藤木さん:聞こえない弟を持つ姉

3 今後に向けて

- ・参加者の声より、「ひとつの会議室の中で、3つのブースがあり、他のブースのやり取りが聞こえてくることがあり、集中できないことがあった」という趣旨の指摘がいくつかあった。運営側として、より雑多な雰囲気を設定する狙いはあったが、次回はそのような点も考慮し、ブースを設定したい。
- ・お茶菓子を出すことにより、難しいテーマであったとしても話しやすい空気がつくれたと思う。また「本の目次」を作成することにより、参加者が選びやすい設定ができた。
- ・今後、「対話」を促進することにより、「共生」を推進していきたい。そのためにもヒューマンライブラリーという手法は効果的だと思います。継続的に活動を続けていきたい。

第三部 シンポジウム「これから私たちにできること」(高濱明日香)



第一部、第二部の各プログラムの内容を振り返り、これから各自で何ができるのかを考えた。最初に、第一部基調講演、第二部シンポジウムとヒューマンライブラリーを実行委員より内容を共有した。ヒューマンライブラリーについては、ファシリテーターを務めた白江より「佐藤さんの本」に

ついてコメントがあった。ホームレス経験のある佐藤氏の「自分の人生は自分のもの」という言葉が、参加者の印象に残ったようであった。

共有が終わったのち、まずは実行委員からシンポジウムテーマである「共生とは何か」について意見を述べた。

・「共生」って何か。反対の言葉から考えてみると、「暴力」。

・敵と戦うことをやめるのは退屈なのではないか？

相模原事件でも当事者の名前を公表しなかった。敵と戦うことを降りたのか？

・共生は相手がいるからこそ。相手は存在するだけでいいのか？その存在の仕方って何？

・共生を考えると時の見方もバラバラ。だから当事者研究がある。ヒトとコトを分けて議論すべき、といった投げかけがあった。

その後、参加者からも意見を述べてもらった。IYEO 関係者からは、「共生はチャンネル合わせ。個人と個人、お互いの波長合わせを工夫することなのではないか」、「共生って、『共に生きる』と書く。でも、まずは『共に在る』ことから始まるのでは」という意見も頂いた。

他の参加者からは、「共存が実現した状態はあり得ない。そのなかで負の感情にどう付き合うのか」、「お互いのわからなさ、をどう整理するのか、が大事なのではないか」という意見もあった。最後の参加者からの意見は、聴覚障害当事者からろう者の日本語教育の歴史を例に出しながら、「これまでマジョリティがマイノリティに合わせようとさせられたり、その中で反発団体が立ち上がって運動をしたり、歴史はいろんな変遷をたどっている。言いたいのは、無理矢理なにかをさせるのではなく、お互いの意見に耳を傾けること」。この発言に対しての会場の拍手はとても大きかった。

アンケートにもあったが、共生とは何か、答えを求めていた。でもその答えは答えが無いこと。みんなの心の中で共生とは何かを考えることが、共生社会の一歩なのではないか、と思う。

成果と今後の課題(金井 聡)

今回のフォーラムの目的の一つは、「共生」や「インクルージョン」という“大文字”の言葉を、参加者それぞれが、自分自身の文脈において考えることであった。重度障害のある人、LGBT や被差別部落、障害者きょうだいなど、可視化されにくいマイノリティとして生きる人々の姿を通じて、法律や制度における「共生」を、漠然としたものではなく、具体的な人間関係において考えるヒントを得られたのではないかと思う。そのことは、障害者と健常者、マイノリティとマジョリティがどう共生するかという次元を超えて、異なる物語をもつ人同士が、お互いの物語を尊重しつつ、いかに合意形成に向けて歩み寄っていけるか、という民主主義の根幹にもつながる。「“共生”って何？」という、安易な答えが出せない問いだからこそ、第三部のシンポジウムでも拳がったように、「わからないこと」に留まり続ける感性が求められているのではないだろうか。

一方で、フォーラム全体のテーマとして実行委員会側が意図していた内容と、個別のプログラムの内容が連動しきれていなかったという課題は残る。また、とくに第三部では、会場の参加者との意見交換をもつ時間が十分に取れなかったことも、大きな反省点であった。次回以降の課題として、参加者同士の対話が生まれる場づくりを検討していきたい。